

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsuushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsuushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

くもくじ

■巻頭言■

福島原発事故から満11年

デブリ取り出し・廃炉に何十年かけるのか

原野人：2

十六代農家、東電に・・・喝！

横田 芳朝：4

社会主義への確信

滝野 忠：5

―日本労働運動の過去・現在・未来(下)―

◇資料と解説◇

自滅行為はやめよ

・・・7

資料 新社会党K県本部定期大会へ

新社会党滋賀
県本部準備会

―連帯とお祝いのメッセージ

岩井さんと国鉄闘争

山下 俊幸：9

―岩井章さん、生誕100年、没25年(2)―

「あなた(個人)の責任」という会社にごまかされず、

『会社の責任』を明確にし、追及しよう 国労上野反合研：13

◇信州松本通信◇

『資本論』散歩(1) 「大豆と黒豆を食す」 中澤 秀行：15

読者からのおたより ・・・16

旬刊 社会通信

NO.1355

二〇二二年三月一日号

二〇二二年三月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

福島原発事故から満11年

デブリ取り出し・廃炉に何十年かけるのか

どこまで続く原子力緊急事態宣言

事故から満11年になるというのに、原子力災害対策特別措置法（原災対策特措法）に基づく『原子力緊急事態宣言』は解除されていない。法律では「原子力災害の拡大の防止を図るための応急の対策を実施する必要がなくなったと認めるとき」に、首相が解除するとある。「アンダーコントロール」にあるとうそぶいて五輪を誘致した安倍君にも、流石に『原子力緊急事態宣言』は解除できなかった。

原子炉建屋内の現実

原子力規制委員会の調査チームは昨年1月に、2、3号機の原子炉格納容器の上ぶたが極めて高濃度の放射能で汚染されているとする報告書を提出した。20〜30年で廃炉作業を終えるなどとする東電と政府の計画は、完全に吹き飛んでしまった。

2、3号機の原子炉格納容器の上蓋は、規制委が「デブリ（溶け落ちた核燃料）が上にもあるようなもの」というほどに極めて高濃度に汚染されていることが新たに分かったのである。上蓋は直径約12mで分厚いコンクリート製の三枚重ねで、総重量約465トンもあり、動かすのも容易ではない。

2号機の上蓋の放射性セシウムの濃度は、少なくとも2京〜4京ベクレル（京は兆の一百万倍）で事故時に大気に放出された量の2倍程度と推計される。

放射線量は毎時10シーベルトを超え、人が1時間ほどとどまれば確実に死亡する。デブリのある格納容器底部の毎時7〜42シーベルトにも匹敵する。3号機も同様である。

そのため格納容器上部から底部のデブリを取り出すことも極めて難しくなった。日立や東芝や三菱や東電や国が構想する廃炉作業では、どれほど多くの労働者を犠牲にせずにはすまないことか。事故処理にかかった費用は10年間ですでに13兆円を超えている。廃炉作業は日立等々にとっては何十年にもわたって、建設費をはるかに超えて、何十兆円もの儲けになるかもしれないが。

筆者が当初から指摘してきたように、デブリは取り出さず、原子炉や格納容器などは解体しないまま封じ込めて管理保管する以外にないのである。

2、3号炉底部のデブリは、遠隔操作のカメラから短時間ごく局部的に診られただけで、全体像は全く不明なままである。強い放射線によってカメラや挿入装置はすぐに破壊されてしまう。1号炉底部に至っては、まだ少しも映しとることもできていない。

デブリから発せられる放射線で水がどの程度分解されて水素が発生しているのかも分からないまま、水素爆発を防ぐために、やみくもに窒素を注入し続けている。

各建屋上部にあるプールからの核燃料の搬出すら、クレーンなど機器の故障や、核燃料体の変形や、11年前の水素爆発時に生じた瓦礫などに妨げられて、思うようにいかない。

『緊急事態宣言』の解除どころではない。

ALPS汚泥容器などの劣化

多核種除去設備（ALPS）から出る高濃度の放射性物質の汚泥を保管する容器はすでに三千三百基にもなるが、強い放射線などのために劣化が早い。瓦礫を入れたコンテナなども劣化が進む。これらからの漏洩リスクが高まっていて、新しい容器に移し替える必要に迫られている。

大量汚染水のゆくえ

東電も自民党政権も原子力規制委員会も、汚染水の海洋放出処分の方針を「いつまでも先送りはできない」とする。全国漁業協同組合連合会（全漁連）などは「漁業者の総意として絶対反対」である。福島県民も近隣県民もおそらくは国民の圧倒的多数も、反対であろう。韓国など近隣諸国も懸念を示している。

トリチウム（三重水素）は放射能としては弱いものの、水になっていて人体のあらゆるところに出入りし、ベータ線を内部照射するので軽視できない。放出時にいかに希釈しようとも総量は不変である。

放射性セシウムやストロンチウム等々は濾過されているとはいっても、汚染水の絶対量が多いだけに無視できない。人々が懸念するのも当然である。

最善の解決策は、十分な空き地がある第二原発にタンクを造り、配管輸送して放射能が十分に減衰するまで貯蔵することである。セメント固化貯蔵も可能である。こんな明快な解決策が実現されないのは、東電がわずかばかりの所要資金を、利潤のためにはなく漁民、国民のために使うことを惜しむからである。

原子炉建屋の地下に流入する水を防ぐために、東電は凍土法を用いてきたが、筆者らが当初から警告した通り、流れの早い箇所等では凍らない部分が生じている。四方からまともな遮水壁を造って原子炉建屋の下に地下水が流入するのを止めていたら、汚染水の増加はとうになくなっていった。完全循環水冷却方式を確立することもできていたはずである。十全な遮水壁工事を早く実施するほど、タンクの増設は少なくて済む。

中間貯蔵施設と汚染土のゆくえ

第一原発の周辺には千六百ヘクタールの広大な中間貯蔵施設が設置され、県内各地から放射能で汚染された土入りの土のう袋が運ばれてくる。環境省によると搬入予定量は千四百万立方メートル。東京ドーム11個をいっぱいにしてもまだ余る量だ。政府が30年（2044年度）以内に決めると約束した県外最終処分場は、候補地探しも始まっていない。政府は、各地の道路建設などの下積み土に、なし崩し的に使用するつもりである。

避難した人々の帰還状況と避難解除基準

福島県から県外へ避難した人は、かなり減ったとはいえ今でも約3万人を数える。事故後に政府が出した福島県内11市町村の避難指示は徐々に解除が進んではいるが、解除された自治体で暮らす住民は増えていない。

他県民の年間被ばく線量が1ミリシーベルトまでであるのに対して、福島県民の避難解除基準は20ミリベルトと、20倍も高いことが帰還住民の増えない最大の原因である。特に若い世代が少ないのも当然のことである。

広い面積をもつ山林地帯は、除染されていないので、キノコや山菜はセシウムなどの高い放射能を持つ。食べば内部被曝となり、山菜も楽しめない。

約300人に甲状腺がんが発生したのに

通常、子どもの甲状腺がんの発生数は、年間百万人に一〜二人程度なのに対し、原発事故後、福島県の県民健康調査などで約300人が甲状腺がんかその疑いと診断されている。この多数のがん発生に対し、県も国も被曝との因果関係は認められない、と押し通した。

「甲状腺がんになったといえば差別されるのではないか」と恐怖を感じながらも、この1月には、当時6〜16歳で福島県内に住んでいた17〜27歳の男女6人が、勇を鼓して東電に損害賠償を求め東京地裁に提訴した。

十代で甲状腺がんになり、二人が片側を切除、四人が再発で全摘し、肺に転移した人もいる。手術や治療で大学や仕事を辞めたり、日常生活が制限されて再発への不安も抱えている。

少しの反省もない独占資本

独占資本とその代理人たちは、原発事故が国民に何をもたらしたかには目もくれず、目先の利潤のためには設計寿命を過ぎて脆化が進んだ原発まで再稼働させる。

「脱炭素社会実現のために原子力は欠かせない」と原発の再稼働だけでなく新・増設が必要だとする。三菱重工や日立は小型の新型原発の開発にいそしむ。巨額の税金を浪費しながらとうに破綻している高速増殖炉や使用済み核燃料再処理工場にまで未練を残し、海外資本との提携開発も進める。

民衆の立場に立てば脱原発こそが最優先課題であり、洋上風力発電の推進で原発ゼロ・脱火力も容易に可能となるのだが。

(原野人)

十六代農家、東電に・・・喝！

誰にも迷惑かけず70数年生きてきた

原発事故から故郷を追われて間もなく十一年を迎えようとしている。

俺は、先祖から引き継いできた専業農家の十六代目として誰にも迷惑をかけずに七十数年この地で生きてきた。

四世代の賑やかな家族は、毎日の暮らしの中で、家業の農作業を通して秋の収穫を喜び合ったり、孫たちの一日一日の成長を楽しみにしながら毎日を過ごしていたものだ。

【写真】 築125年でも家は健在、このまま先祖からの宝物を大切に維持続けたかったが、高齢者である自分を思うと悩む。南相馬市小高区の自宅

農家十六代の気持ちわかりますか

ー わかんねえだろうな



それがあの3・11の出来事。地震は天災としていつかは来るもので、これに備えてインフラを整備したり、個人的には地震保険などである程度は備えることができるものだ。

ところが今回の原発事故は、絶対安全だという東電のうそを信じたばかりにその被害はとてつもなく大きく、生活基盤そのものを破壊されてしまった。

我家でも事故による急な避難命令から、家族がバラバラに逃げざるを得なかったし、汚染された故郷にはこの十年の間に戻る事は出来なかった。年老いた母は、避難先の特老で息を引き取ったし、息子は震災前と同じ様な会社に就職してしまった。孫たちも、その地域の学校に入り、幸いにも大したはじめにも遭うことも無く通うことができた。

十六代の俺はと言えば、汚染されたといっても、残された田畑を簡単に捨てることも出来ないし、先祖の代から長年お世話になってきた地域社会のこともある。避難先のさいたま市から二七〇キロの高速道を月一回のペースで往復し、残してきた古い家屋敷や荒れ放題の田畑の手入れなどをやったり、地域に少しでも賑わいを取りもどせればとバラなどを植えたりしている。

国や、東電の職員さん。分かりますか。この年老いた農家の十六代の気持ちを。わかかんねえだろうなあ。

許し難い東電の対応

最近東電は、こんな事を言い始めたそうな。

「被害者には十分過ぎる賠償金を払ったのだから、これ以上の損害賠償はあり得ない」だど。

む、む・・・そうか。それじゃ言ってやる。俺ら十年前の平穩に暮らしていた家族、地域社会、豊かな恵みをくれた田畑、山や川それを全てダメにして人々を追い出してしまったのは一体誰なのかと。元通りにしてくれよ。その方が賠償金よりよっぽどいいですよ。東電に強く言いたい、喝！

〔原発事故被害者相双の会 No.117 (2022年2月1日発行)
福島原発避難者訴訟原告 横田 芳朝〕

社会主義への確信

―日本労働運動の過去・現在・未来(下)―

右傾化

臨調行革、労働戦線と政界再編、国鉄民営化の階級闘争で政府・権力者たち、総資本は日本労働運動の指導権を階級的労働運動の総評から労資協調・労資ゆ着の労働組合・連合に与えた。連合は資本の存在、存続と庇護のなかでしか生きられない。したがって、資本に抗し、資本主義をひっくり返し社会主義社会の建設を目標とする自覚した労働者とその勢力・組織は、彼らの敵になる。資本に代わり左派勢力とたたかう。連合の女性会長は、資本を攻撃しない。仲よくしようと手を差し伸ばす。女性会長は進歩の敵であり反動である。

資本とたたかわない―たたかうことを拒むのが方針―のだから労働条件は切り下がる。権利は奪いとられる、賃金は下がる。感染症コロナの大流行は恐慌状態をつく

った。ばらまき財政が進む。大恐慌は阻止したい、失業をおさえたいと。さらに、「コロナ」を口実に、赤字の大宣伝、独占資本の集積と集中そして「合理化」は進む。労働者、飲食店、商店、さまざまな小商工業者の生活は不安と混乱にうめく。政府統計は完全失業者は減ったという。産業予備軍、潜在失業者（不安定雇用労働者）はふえている。街中を疾走する「配達労働者」の増加が示す。

賃金は労働者と家族の生計費である。労資協調主義者は労働者の生活のより企業存続を大事にする。彼らは社会革命を悪とし、改良を善とする。歴史は改良、大きな改良は革命闘争が生んだことを示す。賃金は労働力の価値でなく、労働の価値と叫びまわる。労働は労働力の使用価値であるから、価値をつくりはしない。労働が価値として社会にあらわれるのは、私有財産制度と分業という社会的矛盾の結果である。

労働者のくらしを第一に考えない賃金要求が、「大幅なんてとんでもない、額率一律要求も」に変えられた「個別賃金要求」だ。要求方式も要求根拠も、闘い方もわかりにくくなった。連合会長の出身産別であるJAMは個別賃金を推進する。春闘討論集会では、要求は最低水準だ、到達水準だ、さらには中期の目標水準だと、それが本当の目標なのかわかりづらい。

資本の発展は、階級対立をわかりやすくする。だれが笑い、だれが苦しんでいるかはつきりさせる。資本は諸現象をわかりにくくすることに必死になる。労働組合がわかりにくくする方針を掲げ喜ぶのは資本である。

連合は、政府や資本を「対立者」とは考えない。「共存者」「パートナー」と考える。己の意をくんでくれる味方、よき理解者と考える。力関係ははつきりしている。労資間では力およばない。だから政府にたよろうとする。「官製春闘」がこれである。岸田内閣を裏で仕切るのは独占資本家たちだから、賃金も労働条件も上がるわけがない。こうして、搾取の度が上がる。「働き」方という「働かせられ」方である。

分配

最後に分配についてふれる。社会の存在と存続は生産、交換、分配、消費からなる。ここで规定的なのは生産のあり方だ。現代社会では経営者が生産手段を独占する。富は労働者の労働力がつくる。しかし、富は経営者が独占する。そこから分配が始まる。経営者の懐に手をつっこみ、富の分配をせまる。どう吐き出させるかだ。この単純な事実、分配に法則はなく、力関係が決することを告げる。

党派性

新社会党は社会主義政党である。綱領である『21世紀宣言』がそう宣言する。党指導部が社会主義への確信を失なった。党派性が消えた。社会民主主義、市民主義である。2013年参院選で党員を社民党員に“移行”させ、社民党枠で立候補させたことに始まる。

強い力をもつ自公に対抗するには共闘が必要だ。国政にとどまらず大きな地方選でもそうだ。政党は党名が違いうように、主義・主張が違ふ。だから、“共闘”なのだ。共闘は各党の主義・主張を放り投げることではない。主義・主張をもち、当面の任務に政策を合わせるのである。事態が成長・発展すれば共闘のあり方、政策も変わる。わが指導部は立憲に行かない、社民党を「新生社民党」と定義づける。これはおかしい。わが指導部は立憲民主をそれまで“立憲主義”“立憲政党”と礼賛した。立民

に路線上の変化はない。社民と立憲の合同で、とつぜんの社民評価、「新社民党」論である。立憲も社民も路線は変わらない。評価を変えたのは新社会党である。新社会本部は共闘運動のなかで「党派性」を失った。

社会主義と社会民主主義

社会主義と社会民主主義、言葉は似ている。しかし、その階級的概念（正確な階級の定義）は大きく違う。社会主義は古く歴史的な言葉であり、社会民主主義は新しい概念だ。社会民主主義はどのように生まれ、どのような内容なのか。マルクスは『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』でこう定義する。

「山岳党（小ブルジョアジーの弁護士や文筆家）は社会主義の指導者たち（労働者）と（1852年）同盟を結んだ。

共同の綱領が起草された。プロレタリアートの社会的要求からは、革命的な点が骨抜きにされ、かわりに民主主義的な言いまわしが与えられて、小ブルジョア層の民主的な要求からはたんに政治的な形式がとりさられて、かわりにその社会主義的な点が強調された。こうして社会民主主義が生まれた」（岩波文庫、57頁）

マルクスがここで云っていることは、社会主義は民主的共和制度が、資本と賃労働の対立を廃止するのに、社会民主主義は対立を廃止するのではなく、この対立を弱めこれを調和に変えるための手段としている、ということである。その内容はマルクスの時代も今も同じだ。社会体制は資本主義であるからだ。その内容は民主的な方法で社会を変えること、ただし、ブルジョアの限界内でかえることにすぎない。

社会主義への確信

ギリシヤの格言は「魚は頭から腐る」という。われわれはソ連、社会党、総評の「頭」でくり返し経験させられた、そして今、わが党である。こんな指導部は蹴ちらさなければならぬ。それが二十有余年、がんばり続けた党員の責務である。社会主義に確信をもつ。そのための学習、実践である。

わが党の任務はなにか。結党からひたすら国会での議席をめざした。結果はゼロ。そのなかで仲間がふえたか。ふえていない。なぜかを反省すべきだ。われわれは共闘運動、ユニオン運動等、地域の仲間と交流する、それらを地域の力に転化することだ。地方議員獲得である。こうして、未来への種をまく。カストロさんが強調した。「思想は武器に勝つ」「学習は社会主義的人間をつくる」である。

こうして、新社会党の中に「社会主義は必然」との思想を植えつつ、それを広く宣伝することである。（滝野 忠）

◇資料と解説◇

自滅行為はやめよ

わが首脳部は、科学的社会主義を忘れてBIに走り、独占資本の支配下でコモン（共有財産）を増やしてゆけば社会主義が実現できるかのような空想に陥り、ついには社会主義革命を追求する政党などは不要だとばかりに自滅行為に走り出したらしい。

我が党にとっては長年にわたる党員の血と汗の結晶である3千万円を、無駄に浪費しようとしている。

社民党にとっては、新社会党が自らの3千万円を使って、〇委員長か誰かを立て、たとえ1万票でも3万票でも（12年前の原和美で3万8千票）とって、社民党の2%の政党要件確保と福島瑞穂当選に力を注いでくれたら、こんなに有難いことはない。しかも2番手くらいならまだしも、3番手、4番手くらいで1万票や3万票程度なら、新社会党の言うことに左右されずに、社民党はこれからも党内運営はもとより、国政選挙対策もできるといえるものである。

「第3極の創出」を目指して3千万円をはたいても、当選の見込みのない新社会党は自滅するほかはない。社会主義と社民主義の違いも分からなくなっているらしいわが首脳部の一部は、これでも満足するのであるが。当面は候補者を持ってない我々が、投票で社民党や共産党を支援するのは当然であるが。

独占資本の反動的な政策に反対する共同戦線の一翼を担い、やがては共同戦線政府を樹立し、さらには社会主義政権に発展させる目標を持つ真面目な黨員にとっては、このような自滅的行為を許せるわけがない。3千万円を灰にするようなことはやめて、将来を見据えて自治体議員を増やすためにこそ活用すべきである。（原野人）

◇資料 新社会党K県本部定期大会へ 連帯とお祝いのメッセージ

新社会党滋賀県本部準備会

貴大会のご盛会を祝します。

私どものメンバーも一定数、K県本部の黨員として、東京での全国大会の大会場満席の興奮に包まれそれを祝しあい、ほどなくしてK県本部の結成大会を勝ち取ってから26年の歳月を迎えます。

小選挙区制、とりわけ天下の悪法・悪制度である衆議院小選挙区比例代表並立制の壁に阻まれ、私どものレジスタンスもむなしく政党要件なし、全国的には政党活動や選挙闘争もマスコミ的には厳として無視抹殺される四半世紀、歯を食いしばって闘いぬいてまいりました。

一方、瞬間的に民主党政権が到来したとはいえ、かえって逆効果となり、自民・公明の悪政がこの日本列島に深く広く蝕んできています。新型コロナ感染問題に解決策は無策な上、大阪に見られるように維新の会の社会保障・福祉切り捨て、保健所つぶしの独占資本のカネもうけ優先政治のため、私たち民衆の命とくらしはぎりぎりの予断を許さない状態となっています。にもかかわらず、その維新と連合右派・旧民主党・同盟の再来と言える連合本部と国民民主党の結託による改憲路線は平和憲法にとり、危機的状態です。

これに立ち向かうには国政復帰を客観的・主体的条件を無視してはならずこの夏の参院選に新社会党の虎の子とも言える数千万円の積立金を使い果たし、新社会党の枠の候補者を社民党の政党要件内に設けて、そのことによって社民党の福島瑞穂党首の再選に新社会党の政治生命を投げ捨てるのは、冒険主義というか、見境がない方針と言えます。

来年春の統一自治体選挙を見据え、滋賀県ではこの春A市議選補欠選挙で、党推薦の無所属新人めざし、また来春の本番選挙でも三度挑戦し闘う準備を進めています。大津市での月一回の10年継続100回デモに続いて湖東での脱原発デモ行進も昨年10月から開始し、マスコミ報道でも取り上げられ注目を集めています。他人の政党の政党要件活用などの奇策ではなく、現場からの大衆運動に党員が汗かき正道を追求する中で、問題の解決策は出てくるものと思います。

昨春にはB市の無所属・党推薦・D市議の再選も果たしました。

やはり大衆運動を精一杯闘う中で、地道に党公認の青年・女性の地方議員立候補と当選を果たし、来るべきときにわが党が日本における平和革命を担えるような国政チャレンジの戦略を構築する必要があると思います。従って、この2月の党全国大会では選挙区で立憲民主党や無所属や共産党の野党統一候補を応援するのと同じくらいの感覚で、それくらいのノリで、比例区は社民党・福島瑞穂の応援をする。どうしてもいやな県本部は丁県本部のように共産党をやってもいい。いずれにせよ玉碎覚悟で新社会党の3役を立てて虎の子はたいして小オリーブの木候補者の疲れる選挙をしない、その中で統一自治体選挙の展望を具体化する道を共にさぐっていたかどうかよう要望し、お祝いのご挨拶とします。(2022年2月12日)

岩井さんと国鉄闘争

―岩井章さん、生誕100年、没25年(2)―

「国鉄清算事業団闘争に連帯する会」発足

岩井章、村上寛治の両国労顧問と宮里邦雄、大橋堅固ら国労常任弁護団・講師団ら計7氏の発起人による要請で引き受けて頂いた呼びかけ人54名、会計監査2名によって、第1回「呼びかけ人会議」(1988年10月7日)が開催され、発足総会の日程と内容、会の運営と方針、具体的進め方、賛同人の獲得、当面の会員獲得5万人を確認した。

岩井さんら7氏の発起人の呼びかけによって開催された発足総会(1988年11月11日)は満席の国労会館ホールで感動と熱気にあふれていた。発足総会には新会社JRを不採用(国鉄を解雇)になった国労組合員・家族が北海道、仙台、九州など全国から29名が参加した。発起人を代表して岩井さんは「国労の労働者がやられているから助けるのではない。この闘いが労働運動を強化することになるからだ」「やっここまで来た。国労4万人の頑張りこそ、私のいうまともな労働運動だ」と話された。私は岩井さんの「やっここまで来た」との言葉の中に岩井さんの思いが凝縮しており、その闘いの先頭に立つ覚悟を感じたのだった。

発足総会1ヶ月後、第2回「呼びかけ人会議」(1988年12月13日)を開催し、岩井さんをはじめ呼びかけ人各氏と国労の稲田委員長、宮坂書記長ら中執が参加して協議。賛同人の獲得と会員拡大、「会計監査」と「呼びかけ人会議」を年2回定例化することを確認した。

それ以来、岩井さんは亡くなるまで1度も欠席することなく、会議の中心に位置して責任を果たし続けたのだった。

会員拡大の先頭に

岩井さんは各種学習会や集会に招かれると必ず言う言葉は「すべての労働者、勤労者仲間に連帯する会に参加して頂きたい。そして月3000円のカンパをして頂きたい。事情が許せる人には年間1万円のカンパをして頂きたい。連帯する会のねらいは、連帯の輪を広げるとともに、資金を集めることで闘争を進めたい。是非とも御協力を願いたい」と。

自らも熱海の自宅の近隣の方々、労働組合幹部などに呼び掛けて会員を獲得してきた。こうした岩井さんの呼びかけや行動に応えるかのように国労の各級機関、全国から会員拡大のウネリが起きた。国労は中央委員会(1989年3月10日)で、1組合員3名を最低目標に各地方本部ごとに目標を立てて取り組み、8月の全国大会までに10万人の会員拡大に取り組むことを確認。国労OBも動き出した。

全国各地で支援集会の開催、「連帯する会」の地方組織、職場内組織の結成。そして北海道の全道労協、九州の長崎・佐賀県評など10数県が直ちに動き出し、地区労も動き出した。岩井さんは各地の集会に出かけた。1989年1月24日、北海道地労委は国労組合員の採用差別は不当労働行為と断罪し1704名の救済命令を出した。これを契機に拡大運動は一気に全国的運動になった。

3月30日〜4月1日には、北海道、仙台、九州の清算事業団組合員の子供たち36名、付き添いの家族10名、計46名の家族上京団を迎え、子供たちによる政府、政党(自民党、社会党、共産党)への要請行動。3月31日には日比野外音楽堂で総決起集会が開催された。

生活対策「組織的自活体制」提案

岩井さんは清算事業団の雇用対策支所を訪問し激励行動を本格化した。案内役は主に現地の国労役員、時には私が担った。広域採用について直接言及することはなかったが、度々私に状況を聞いてきた。1990年4月1日、再就職未内定者1047名(国労966名)が国鉄清算事業団から2度目の解雇となった。岩井さんが心配していたことが現実となった。岩井さんは「何人ぐらい残りそうか」と聞いてきた。「当局側は40〜50人程と見ているようですが、現場の実感から1000名程にはなるだろう」と答えたことを思い出す。

国労本部は私たちに早い段階から1990年4月以降の態勢について検討を求めている。岩井さんは、直ちに生活対策を提言された。「生活費を20万円なら2億円である。『連帯する会』会員が仮に10万人としてもどうてい支えることは出来ない。物販でも、そんなに上手くいくとは思えない。やっぱり国労組合員が1人5000円程度必要ではないか、アルバイトも必要だろう」と。

私は岩井さんとの意見交換の場で「国労組合員の1人5000円は難しい、このカンパが負担となって本部に対する不満や脱退につながるものが心配、長期闘争を見据えて、民間争議の自主生産や仕事おこしの例」を話した。更に、当面は失業保険とアルバイトでしのぎながら、個別アルバイトは集団的アルバイトへ、集団的アルバイトは請負事業へ。更に地元の支援共闘の実態や自治体の実態に合わせた自立した事業を確立する、全国から寄せられるカンパは闘争費、行動費に、など国労本部で検討して

きたことを説明した。更に私たちは「生活と闘いの両立」を確立するための「組織的自活態勢」づくりの「私案」を策定した。

闘争団激励に奔走

私は、前述したように「連帯する会」発足前段で1987年4月1日の清算事業団雇用対策支所に国労組合員らが收容されてから、労働組合、地区労などの学習会に招かれると、主に北海道だったが必ず雇用対策支所を訪問し激励してきた。時には自動車で昭和電工の解雇された仲間を連れて、その数は計10回、延べ55日であった。従って、現地の状況を岩井さんにも直接見てもらい激励して欲しい旨お願いした。

岩井さんは、忙しく全国の県評・地区労・組合・支援共闘などの学習会、集会に向いた。そして国労支援を訴え続けた。現地の要請もあったが、積極的に闘争団をまわり、特に生活の実態に耳を傾けていた。私は、岩井さんの日程を調整して、ほとんどの闘争団に向向してもらった。訪問する闘争団の状況について事前に説明し、私が案内役として同行したことも数限りない。泊りは旧国鉄の寮がほとんどで、8畳間に枕を並べて寝ていた。強行軍でも、安宿でも、食事についても不満を口にされたことはなかった。

事業体の成功の秘訣は幹部の決意、態度、信頼が必要だ。博多の「クリーンセンター博多」を訪問の際、事前に現場責任者の岸茂利さんのことを話したことがあった。岸さんは寡黙だが人柄が素晴らしく、黙々と働き作業の先頭に立つ。団長の神宮さんや仲間の信頼が厚い、こういう人がいると上手くいくんです。まあ、「親方」です。と。岩井さんはさっそく作業現場を視察したい、ということで樹木を伐採する作業現場に向向いた。汗にまみれた岸さんに「いやあ、頑張っているね、君が親方だね」声を掛けられた岸さんは恐縮していたが、みんな明るい空気になったことを思い出す。帰り際には、きまって「頑張つて、身体に気を付けて」と言葉をかける。その後も何度か「親方」の現況について聞いてきた。

私は現状報告と助言を求めて、たびたび熱海の自宅や東京・八重洲の事務所を訪ねた。帰り際には必ず「ご苦労さん、頑張つて、宜しく頼むよ」と。岩井さんの労働者に接する態度、優しさは忘れられない。

エピソード

【三池闘争】三池にはたびたび行ったけど、当時は列車でね、行くときは全国から集まったカンパをジュラルミンに入れて持つてくん、右翼のこともあってSP2人が付いてたが、SPはジュラルミンのトランクを持つ係だった、彼らには世話になつた、申し訳なかったなあ、合計20億円くらい運んだ。三池に着くと皆喜んでくれた、苦しい生活だったからカンパはね。（注・現在に換算すると約300億〜350億円だと思ふ）。

【向坂逸郎】総評辞めた時、成田委員長から衆議院選挙に出てほしいと言われたことがあった。受ける気はなかったが同席していた向坂先生は笑っていたなあ、先生は受けるわけない、と思つていたからな。

【読書】列車でも飛行機でも、宿でも寝る前に何時も本を持っている。「いつもどんな本を読んでいるのですか」との問いに「旅では小説か、歴史ものが多い」、「マル

クスやレーニンなどの本を読むのが好きだ、特に向坂先生の本は勉強になる、読むと、うなずくことばかりだ」。

【麻雀】事務局の方々に初めて熱海の自宅を訪問した時、自己紹介などの話が一通り終わったところで、「君たち麻雀出来るだろう、やろう」と。麻雀の牌も卓もあつた。若いころ遊び人であつた私は「岩井さんの腕など・・・と思いきや、2時間で結果は岩井さんの勝ち」。

【中央共闘】「国労が頑張るためには、とにかく、連帯する会の会員を増やすことだ、もう一つは共闘会議だ、2本柱が必要だ。そして、翌年の1989年11月7日、国鉄闘争支援中央支援共闘会議(中里忠仁議長)が結成され、岩井さんは代表委員に就いた。私も副議長を担った。

【沖縄オルグ】1989年4月の「呼びかけ人会議」は会員拡大が議論となつた。岩井さん、宮里弁護士から沖縄へ要請に行つて欲しい、と言われた。岩井さんは知り合いが多い、特に高教組は懇意にしていた。宮里先生は沖縄出身。6月13日、沖縄に向かい、県労評を表敬訪問し、受け入れを準備してくれた全港湾、私鉄・沖縄バスの役員がお世話してくれた。加入運動が始まり、会員が急速に増えた。その後、高教組の提案で「国鉄闘争支援集会」の開催、沖縄における物資販売活動が始まつた。

【国労委員長】1997年夏、国労定期大会の前に、永田稔光委員長の満期引退が予定され、次期委員長について選考が始まつていたらしい。岩井さんが亡くなる直前のことだった、岩井さんから「高橋(義則)君と親しいのだろう、高橋君が委員長を固辞しているらしい、東京で本部を支えると言つてるらしいが、本部はもっと大事だ」と。

【焼酎】北海道の北見、釧路などに同伴した時、「君は北海道のどこなの」「斜里です。旧上斜里町・現清里町です」「清里の『じゃがいも焼酎』は美味いね、一度松里(福慈)君からもらつたことがあつた、美味しかった、では近くですから焼酎工場に寄りましょう、となつて工場を見学し清里焼酎を買つた。

【魚釣り】釧路で海岸沿いを移動中に海を見ながら「この辺で、釣りをしたことがあつた。堀井さん(総評・堀井利勝議長1966〜1970年)が釧路臨海鉄道の出身だね、あの時は良く釣れた、楽しかったよ、毎日忙しかつたので堀井さんが気を使つてくれたんだ。

結びに

岩井さんとの思い出を喚起するため、当時の写真や資料に目を通していたところ、貴重なものがあつたので紹介する。1989年3月31日、日比谷集会で発表されたアピールである(詩・滝野忠さん作)。

国鉄労働者よ!

働く者の優しさと不屈で強じんな心を、さらに歌いたたえよ。君たちの歌が、働く者の魂を揺り動かし、かのマルセイユやインターナショナルのメロディーとなり、われわれの実行を奮い起こすために。

国鉄労働者よ！

君たちはわれわれの誇り、反動に立ち向かう最大の砦、そして歴史の機関車。

国鉄労働者よ！

今や君たちは底力をしめすとき。世は嵐にたけり波を打つ。波は高く、そそり立つまさに反撃のときだ。君たちを不幸のどん底におとしいれた、国鉄「分割・民営化」の元凶中曽根は身をすくめ、竹下自民党内閣崩壊の地鳴りが聞こえる。待ちに待ったときがきた。

国鉄労働者よ！

帆を高く上げよ。地労委救済命令、参院付帯決議の実行を歌え。「分割・民営化」の矛盾を切り裂け。それは働く者すべての願い、君たちの愛する者の願い。

国鉄労働者よ！

働く者のトランペットとなれ。吹け、鳴れ、響け、轟け。私たち最愛の家族を迫害した者すべてが逃げ去る日まで。われわれもいま大きな声で、君たちの声に呼応する。

岩井さんの想い出はつきないが、また別の機会に記したい。改めて岩井さんのご冥福をお祈りし、岩井さんの功績を語り継いでいきたい。

本誌No.1248(2017年9月15日)、No.1333(2021年4月1日)にも掲載されています。(山下 俊幸)

「あなた(個人)の責任」という会社にごまかされず、

『会社の責任』を明確にし、追及しよう

2022年1月8日、上野反合研の19回目となる「新春学習交流会」が、国労東京支部の組合員を中心に、OBや若い組合員、未加入の仲間を含め、約30名の参加で行われた。昨年はコロナ「第三波」の頂点にあたり(開催日前々日の、東京での新規感染者が過去最高の2447名)やむなく開催を中止したが、今年はオミクロン株急拡大の動きがあるとはいえ、前々日で東京641名であるため、開催することにした。とはいえ、例年の会食交流をやめ、1時間おきに換気、マスク越しのマイク使用という形で感染防止対策を行い、充実した13〜17時の学習交流となった。

すさまじい労務管理は、何故、行われるのか

学習交流会のメイン講師は、元JR東海の新幹線運転士で元国労東京地本新幹線支部書記長の蓑輪泰臣さん。講演のテーマは「私の乗務の経験と『学ぶ』ということ」。

蓑輪さんはまず、「何故?」という視点でものを考えることが大事、物事には「目的」があり、現象には「原因」がある。「何故?」と考え、「本質」を見つけ出す。それを労働者としての物の考え方で見ると、ことが大事だと強調。

JR東海は、労務管理を「哲学」として位置付けている。つまり、労働者から「労働者としての物の見方・考え方」≡労働者思想を奪い、会社に従順に従う「従業員」にしていくのが目的。実際は作業ミスを許さない、「恐怖管理」とも言える人間性を否定する内容で、管理者等への絶対服従の強要、逆らう者には容赦ない高圧的態度。

運転1分の遅れで「責任事故」、車両故障時の応急処置を誤っても、乗務行路表や帽子を失くしただけでも、即「乗務停止」、職場への「送還」、犯罪者扱いされて「状況報告書」「始末書」等々書かされる。

それは「個人責任」を植え付けることによって会社の言うことには従わせる（会社に行くのが嫌になるくらいだ）ということ。「助役添乗」で「指先と目線が合っていない」「決められた言い方で喚呼していない」と揚げ足取り・間違い探し。帽子でも少し目を離すと助役が持って行ってしまい、後に「一時紛失」扱いされたこともある。毎日が異常な精神状態での乗務となり、そういう恐怖管理の先にどのようなことが起きるのか。

マスコミでも報じられたが、回送列車での帽子事件というのがあった。大井基地から東京駅に向かう運転中、帽子がないことに気づいた運転士が、スピードが落ちないよう力行状態にして運転台を離れ、16号車から1号車まで帽子を探しに行った。新橋を走行するあたりで指令が遅れを認め、運転士不在が発覚。帽子は16号車洗面台にあったが、運転士の「虚偽報告」となり、毎日日勤で責任追及、整備会社に出向、復帰することなく定年退職した。運転士が運転台を離れるという怖いことは、異常な労務管理が起こさせたと言える。

107名の生命が亡くなったJR西日本の福知山線脱線事故もそういう労務管理の中で起きた。懲罰的な「日勤教育」への恐怖心から、半径304mの急カーブ、制限速度70km/hに116km/hで進入し、マンシヨンに衝突した。会社は「個人の責任」（速度オーバー）のみを事故原因にするが、何故、運転台を離れてまで帽子を取りに行ったのか（東海）、何故、危険な高速運転をするまでの精神状態に至ったのか（西日本）、この問題を掘り起こさない限り、同じような事故は必ず起きる。

「還流制度」（JR東では「ライフサイクル」）をめぐる問題

運転士が駅に5年間勤務し、再度運転士に復帰するという「還流制度」が提案された。私は、「国労の運転士を運転職場から追い出すもの、片道切符だから制度そのものに反対」と訴えたが、当時の東海本部は、「5年後には『復帰』する制度だから反対できない」と。しかし現実私の言った通りになった。

この制度によって配転させられた国労組合員だけでなく他労組合員の声も拾い上げて、「社会通信」に投稿した。その内容が大阪の他労組掲示板で紹介され、会社側と国労役員による投稿者探しが始まった。ある日突然私の列車に、東京から静岡まで大阪の運輸営業部長が添乗してきた。部長はテープレコーダーを秘かに持ち、何気ない会話から核心に至るまで誘導してきた。私もはぐらかして応答したが、翌日乗務終了後、指導科長から録音されていたこと、会社は核心をつかむことができず悔しさにじませていたことを知った。その後も私への監視は厳しくなったが、他の労組の不満をとり上げたのが会社にとっては怖かったのだと思う。

学習で合理化の本質を知る、「個人の責任論」に「会社の責任」論で対抗しよう

資本主義における「合理化」は会社の利潤追求を目的にしているから永遠に続く。儲けの追求をやめることは企業として、資本家として成り立たなくなる。新幹線の合理化は、速度アップとして行われる。同じ時間であれば乗務距離が長くなる（疲労の

増大)。運転士が車掌を兼ねるようになり、車掌が削減（3↓2名）される。一人乗務の弊害（トイレ・災害異常時の対応・相談相手なし）。JR東日本も出したが、新幹線の無人運転化も近い。

合理化は際限なく押し寄せてくる。下請け化、出向、配転、無人化……。しかし合理化の結果による労働者の痛みや矛盾を消すことはできない。労働者の不満と怒りが、一人では弱い労働者を団結させた。そういう意味では、資本が労働組合を作り出した。会社は必死になって労働組合不要論を展開し、資本と闘おうとする組合をつぶし、社内誌やインフォーマル組織、その他様々なものを活用して、「矛盾」の隠蔽（「個人の責任」論）を図ろうとする。資本・会社のこうした隠蔽工作や組織破壊に対して、現実の実態を暴露し、「個人の責任」論に対して「会社の責任」で対抗する、すなわち、労働組合の必要性、人間性回復の重要性は測り知れないものがあり、厳しいけどやりがいがある。

こういう取り組みが継続してできるためには、資本・会社の本質を見極める学習が必要。我々労働者は勉強が足らな過ぎた。今、勉強してみても自分が変わったと思う。頭の中が整理されていく。合理化は問題を必ず吹き上げらせる。それを見る目ができる。〔国労上野反合研事務局『討議資料』No.225（2022年1月13日発行）〕

◇信州松本通信◇

「大豆と黒豆を食す」

『資本論』散歩（1）

毎日食する物として、「大豆乃至黒豆」があります。行きつけの店の納豆には、大豆のそれと黒豆のそれと二種類がありますが、わが家の納豆は基本的に大豆であります。昔から店に置かれている大きな一パックを、醤油等を使わずそのまま毎日食しています。また、連れ合いが炊いてくれる黒豆や大豆も、ほぼ毎日のように口に入ります。

『向坂逸郎「治安維持法違反事件」裁判記録』の編集・校訂に携わって以来、リービヒという19世紀最大の化学者（有機化学者）に興味をもっています。戦前、向坂先生は人民戦線事件での保釈後、生活するために科学的な方法でジャガイモ、カボチャ、サツマイモ等々を栽培するために、肥料学や地質学等々を勉強したというのですが、リービヒのことを相当詳しく勉強していたのではないかと思えます。

『資本論』にも度々リービヒの著作が登場しますので、興味を持ってしまします。納豆や煮豆を食する時、リービヒの次の一節を思い出さずにはいられません。

「南アメリカの鉦山労働者の毎日の仕事（おそらく世界中での最重労働）は、重量一八〇——二〇〇封度（ポンド）の鉦石の荷を、四五〇フィートの深部から、肩で地上に運び出すことであるが、彼らは、パンと豆だけで生きている。彼らは、パンだけを食いたいのであるが、パンでは、彼らがそのようなに激しくは労働しえないことを知っている彼らの雇い主は、彼らを馬のように扱って、豆を食うことを彼らに強制する。しかし豆はパンに比して、はるかに燐酸石灰に富んでいるのである」（リービヒ『科学の農業および生理学への応用』第一部、一九四ページ注）『資本論』岩波文庫第三分冊112〜113頁」、という訳です。

豆が重労働をするには必要で、重労働に耐えうる栄養分を備えている、というこ

となのです。子供の頃、零細農家の我が家では、田圃という田圃の畦に大豆を植え、採れた大豆で味噌を作り、また日常的に煮豆にして食していました。大豆は「畑の肉」と教わったものです。

『資本論』の勉強も中々の重労働であります。『資本論』フランス語版への「序文と後書」のしめくくりの一文で、マルクスは「学問には坦々たる大道はありません。そしてただ、学問の急峻な山路をよじ登るのに疲労困憊をいとわれない者だけが、輝かしい絶頂をきわめる希望をもつのです。」と述べています。「輝かしい絶頂をきわめる」ことは私のような凡人には所詮無理なのでしようが、マルクスは「労働者」と「勤労者」のためにこの書を残したのですから、生命ある限り上を目指したいものです。脳髓に重労働を課すのでしようから、豆を食し続けてであります。

(2022年2月4日 中澤 秀行)

◇読者からのおたより◇

「コロナに負けるな！労働相談年越しホットライン」を開催 NPO非正規労働相談センターひろしまは、スクラムユニオン・ひろしまとともに「コロナに負けるな！労働相談年越しホットライン」をテーマにして、12月10日(金)、11日(土)の両日、2021年最後の電話相談ホットラインを開催しました。今回は、NHK、RCC、TSSのマスコミ3社から事前に取材の申し入れがありました。当日市内で重大事故発生ということで急に中止となり、その結果、中国新聞の紹介記事のみとなりました。直前の12月8日に反貧困ネットワーク広島島の電話相談があったことも影響したのか、残念ながら両日とおして電話相談はなく、2件の面談にとどまりました。

面談の一つは、ベトナム人技能実習生からの相談で、通訳を急ぎよ要請して対応に当たりました。相談内容は、資格外活動の業務を強制され、実習実施者に抗議すると仕事をさせないというもので、悪質な経営者の実態が訴えられました。NPOはスクラムユニオン・ひろしまにつなげて改善に向けて早急に取り組むことを確認しました。

今回のホットラインでは、マスコミによる宣伝効果をあらためて痛感することとなりました。社会にはまだまだ理不尽な雇止めや給与の未払い、パワハラ、セクハラほか、さまざまな労働問題が埋もれているはず。私たちはそれらをなんとか掘り起こしていかなければいけないと考えています。

「NPO非正規労働相談センターひろしま」通信第16号(2022年1月20日)
赤字予算 政府が2021年12月24日閣議決定した2022年度予算案は、一般会計の総額が107兆5964億円と過去最大となります。

①歳出は10年連続最大。社会保障費過去最大36兆2735億円、防衛費過去最大5兆3687億円、国債費は2年連続で過去最大24兆3687億円

②歳入は、税収見込み過去最高65兆2350億円、新規国債発行額は36兆9260億円となり発行残高は、22年度末に約1027兆円となり、国内総生産(GDP)比でみた、日本の債務比率は先進国では最悪の水準になります。

このような状況下で、岸田政権の「新しい資本主義」で働く者の生活が豊かになるのでしょうか、憲法の改悪で働く者が人間らしく働きつづけ、文化的な生活を営む現憲法守り抜く為に、職場で、地域で討論を深めましょう。(三池COと共闘の会『三池CO』No.217 2022年1月1日)
今年「減農」 今回の思い出の郵便ポストは、永田郵便局前の丸型郵便ポストです。何回か登場していますが、今年は豪雪のためちよつと雪景色をと思い載せてみました。そんな雪の中、りんご畑へ出勤。剪定作業に着手。今年は仕事量減らす「減農」します。(長野県飯綱町 山浦隆芳)